

花ちゃん、オー君、モンタ博士のわくわくドキドキ冒険記3

国立市立国立第七小学校

平成27年7月6日 NO.40 (240)



花ちゃん 「うわあー！^{おお}大きなナナフシ！」

オー君 「お！花ちゃんもナナフシは^し知っているんだね。」

花ちゃん 「もちろんですよ。だって、^{ほか}他の^{かたち}形をした^{こんちゆう}昆虫っていないでしょ。」

オー君 「そのとおりだね。では、ナナフシは^{なん}何の^{なかま}仲間かな。」

花ちゃん 「そうだな。カマキリとはちがうし、バッタでもないし・・・。」

オー君 「ナナフシはね、ナナフシの^{なかま}仲間なのさ。つまり、カマキリやゴキブリと^{おな}同じように、それだけで1つの^{つく}グループを作っているのさ（これも^{もく}目という）。」

モンタ博士 「ほほー！今日は、ナナフシのお^{きよう}勉強^{べんきようかい}会かい。だれが^み見つけたのかな。」

オー君 「このナナフシは、3-1のFくんがおうちの^{ちか}近くで^み見つけたそうです。」

モンタ博士 「^{くにたちななしょう}国立七小の^{こどもたち}たくさんの子供達が、^{こんちゆう}いろいろな^{しょくぶつ}昆虫や^み植物を見せに^も持ってきて^み見せてくれるのは^{うれ}嬉しいけど、^{ぜんぶ}全部を^{しょうかい}紹介できなくて、^{ほんとう}本当にごめんね。
まあ、ゆっくりと^{くにたち}ポチポチとこの『国立てくてく』に^の載せていくね。」

花ちゃん 「ところで、ナナフシって、どうしてナナフシというのですか。」

モンタ博士 「^{かんじ}漢字では『^{たけたけふし}竹七節』と^か書き^よナナフシと^{たけ}読むんだ。竹の^{こえだ}小枝^{ふし}みたいで^{ふし}節がたく

さんあるからさ。また、七つの不思議があるからとかとも言われるね。」

オー君 「七つの不思議？おもしろそうですね。」

モンタ博士 「ますね、ナナフシにはオスがあまりいないということさ。」

花ちゃん 「オスがなくて、メスばかりだと、交尾できませんね。」

モンタ博士 「そこが不思議でね、ナナフシは交尾しなくて、メスだけで子孫を残すことができる生き物で、むずかしい言葉で、『単為生殖』で生きているんだ。」

オー君 「ふーん。そうなんだ。そりゃ不思議ですね。」

モンタ博士 「それから、ナナフシのかくれんぼの名人で、木の枝に似ていて、敵である鳥などから見つからないようにしているんだ。これを『擬態』というね。」

花ちゃん 「かくれんぼ名人なんですね。敵から見つからないといいですね。」

モンタ博士 「それからね、敵からおそわれ足などが取れてしまうとね、また、同じ所から次の足が出てくるんだよ。これを『再生』というんだよ。」

花ちゃん 「単為生殖とか、擬態とか、再生とか、むずかしい言葉が多いですね。」

オー君 「それに、単為生殖、擬態、再生、どれもむずかしい漢字ばかりだね。」

モンタ博士 「まあまあそういわないでよ。この機会にいろいろな言葉を覚えてしまえばいいんじゃないかな。」

花ちゃん 「そういえば、そうですね。いいチャンスからもしれませんね。」

モンタ博士 「そうなんだ。何か一つのことに興味や関心をもつだろう。それは、それだけの学習にとどまらず、他の学習へと発展するんだよ。そうやって、次から次へといろいろなことを学ぶことが大切なことなんだよ。様々なことを学び、知識を広げていくことは、楽しくすばらしいことなんだね。」

オー君 「なーるほど。わかるような気がします。ぼくは理科が好きだけど、もっと理科を好きになるためには、漢字だって知らなきゃいけないってことですね。」

花ちゃん 「そうか！理科の勉強には、国語も勉強も算数の勉強も必要なんですね。お勉強って、みんなみんなつながっているんですね。」

モンタ博士 「自分の好きなことをもっと好きになるために、もっともっと勉強しようね。」